
見ている.....

DirtyTom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見ている……

【著者名】

ZZード

ZZ903U

【作者名】

DirtyTom

【あらすじ】

ある夜俺は川を流されていくそれに遭遇した。それからだ。何かに見られていると感じるようになったのは……

川を流れていく死体とは絶対に田を合わせるな。
死んだ婆ちゃんに、子供の頃よく言われたことだ。

何でも婆ちゃんが言うには、川を流れていく死体でも田を開けている類は、突然足を滑らせたか何やらで驚いて目を見開いたまま死んでいった輩が多く、恨みや未練よりも不条理な死が受け入れられなくて、この世の名残を見回しているのだということらしい。
田を合わせると助けを求めてしがみついてきて、そのまま川へと引きずり落とされるのだそうだ。

ぞつとしながらそこまで思い返した時、小野田が現れた。

「おう」
すすつていたコーヒーを遠ざけ、小野田と挨拶を交わす。
店内は夕食時といつることもあって多くの客でにぎわっていたが、この喫煙席のボックスならば比較的落ち着いて話ができるそうだ。
小野田は一瞬俺の目の前に座ろうとしてやめ、斜め向かいの通路側の席へと腰を下ろした。

「なんだよ、わざわざ」

「うん、まあな……」

それ以上は追求しなかった。

小野田が注文をするのを横田で見ながら、窓際の席から外の景色を眺める。

ウインドー越しの外の景色は夕暮れから夜へと移り変わろうとしていた。逢魔が時というやつだ。行き交う人の流れや車は当然のようにこちらへは無関心だった。

「飯は?」

「すませてきた」

「そりが……」

「で？」他愛のない会話の後でカフェオレを一口呑み、小野田が白々しく切り出した。「俺に用つて？」

「ああ、うん……」口うちが白々しいのもお互い様だ。「おまえ、見えるんだよな？」

その一言で小野田の表情が変わった。カップをテーブルへ置き、周囲を何度も返り見る。

「どうしてわかった？」

神妙な様子の彼に対し、こちらも隠さずすべてを晒す。

「こないだの同窓会の時、おまえ、俺の方を見てビックリしたような顔しただろ。あれ、見えてたからだよな」

「……まあな

「やつぱりな……」

俺が気落ちしたのがわかつたのか、今度は小野田の方から探しを入れてきた。

「気づいてたのか、おまえ」

「ああ、何となくだけどな」指先の震えを悟られないよう、タバコを探す振りでポケットをまさぐる。「気のせいだといいなと思つてたが、おまえのあの顔を見て確信を持つた。……やつぱりそつか」

「いつからだ？」

差し出したタバコを片手で押しとどめ、そわそわしながら小野田が何度も横を確認する。

当然のことながら、彼の隣には誰も座つてはいない。はた目にはただ外の景色が気になつてゐるだけだと思われたことだろう。

「去年の夏」俺はつつみ隠さず、それまでの経緯を小野田に説明していく。「大きな台風があつたる？ で、近所の川が増水してさ、決壊寸前だつて聞いて、台風はすでに遠くへいっていたから夜中に興味本位で連れと見にいったんだ」

「ああ、すごかつたらしいな」ちらちらと横を意識しながら、小野田が合いの手を入れる。「一人流されたらしいな。下流で死体が上

がつたつて新聞に書いてあつた

「その死体が流されていくところに偶然い合わせたんだ」

「……」

「若い女の死体だつた。いや、それがその時死体だつたかどうかはわからないが……」顎の下の嫌な汗を拭う。「ずっと目がこっちを向いてた。すごい勢いで流されていて、体は仰向けのままなのに、視線だけが俺の方をずっと追いかけてくるんだ。まばたきもできなかつたよ。それからだ。妙な気配を感じるようになつたのは。ずっと誰かに見られているような、嫌な視線を常に感じるようになつた」小野田がゴクリと唾を飲み込む。それは俺の耳にもはつきりと聞こえてきた。

「その連れも見たのか」

「連れは別の方を向いてたから見ていない。俺だけが見た。流れが速くてあつという間だつたし、驚いて声が出なかつたから、連れを呼ぶ余裕もなかつた」

「そうか……」小野田が困つたような顔になつた。「……確定だな」

「やつぱりか……」

わずかに小野田が通路側へと椅子をずらした。

覚悟を決め本題に入る。

「そいつはいつたいどこにいる?」

小野田がまた横へと意識を配る。

だいたいのことはわかつっていたが、この際はつきりさせたかった。「見る勇気はなかつたけど、ずっと気配だけは感じていたんだ。階段の下とか、通りの角とか、車の陰とか。影になつていると全部それに見えてくるから、見ないようになるべく前だけ見るようになつた。電気のともつていない部屋とかも覗かないようになつた。見えないけどそこに何かがいるだらうことは何となくわかつたからな。それがいつからか、気配はするのにどこにいるのかわからなくなつたんだ」

「……」

「なあ、おまえ、どこにいるのか知つてるんだろ。見えてるんだから。教えてくれよ」

「いいのか。そんなこと知つてしまつて」押し殺した小野田の声。
「知らない方がいいんじゃないのか。いることはわかつたんだから、もつとちゃんととした靈能者に見てもらつた方がいい」

小野田がそう言つだらうことは予測していた。それでも知りたかった。いや、知らなければならなかつた。何故なら、このままでいつかそれに取り殺されるだらうと、俺の本能が感じ取つていたからだ。

逃げるのをやめ、ちゃんと対処する。そのためには踏ん切りの宣告が必要だつたのだ。

帰り道や部屋で一人きりになつた時のことを考えると不安になる。それでも今知つておかなければ、また見ない振りをしてしまうに違いないと思い、改めて覚悟を固めた。怖いのは当然、だがなにより真実を知りたいという気持ちが上回つたからだらう。

「教えてくれ……」意を決し、小野田の隣の空席を睨みつけた。「そいつは、そこにいるんだな？ おまえの横から俺を見ているんだよな？」

俺の決意を小野田が汲み取る。

が、返つてきたのは予想を裏切る彼の答えたつた。

「ここにはいない。俺の横には」

「……」動搖を隠せず身を乗り出す。「じゃ、どこにいる？ その横か？ 外か？ わかつた。向こうの通りだな。あつちの通りの方から俺を見ているんだな。この店の中じゃないよな。だつておまえ、こっちの方ばかり気にしてたから……」

「吉口」小野田が俺の名を呼んだ。その表情は何かを伝えるために選んだものだとわかつた。「本当にいいんだな」

「……」今度はこちらが固唾を飲む。今さら何を、と言いかけ、黙つて頷いた。「頼む」

小野田も重々しく頷いてみせた。

「同級会の時、宴会場の端の方からおまえのことを見ているそれに気づいた。でもそんなこと言つてもおまえは信じないだろ? と思つたから何も言わなかつたんだ」

「ああ……」そのとおりだ。俺は靈の存在なんて信じていなかつた。つい最近までは。

「さっきここに来た時、こないだよりずっとその距離が縮まつてることがわかつて、そつとした。これは何かおまえにしようとしている奴だつてわかつた。もう、どうすることもできないかも知れない」

「……」

「彼女はおまえの目の前にいる」

「！」からかうの喉でよつやく次の一言を絞り出す。「……目の前つて」

「すぐ目の前だ。鼻と鼻が触れるくらいの場所から、ずっとおまえだけを見ついてる。俺が見えてるのは、おまえの顔と重なつた彼女の後頭部だけだ」

「……」

思わず絶句する。

すぐ目の前に何かがいる。近すぎて確認することもできない場所から、わき目も振らずに俺だけを見つめている。

この世のものではない何かが、俺を取り殺すために。

言葉が出てこなかつた。今度は何をしても無理だろ。

その呪縛を解き放つたのは、小野田の小さな呻き声だつた。

「……どうした」

「……」小野田が目を見開いていた。そしてわなわなと震える唇から、信じられない言葉が飛び出したのである。「今、また距離が縮まつた……。おまえの鼻とそいつの鼻が重なつていてる。瞼と瞼が……」

それ以上は何も耳に入つてはこなかつた。

ちらと向けた視界の隅で、暗くなつた窓ガラスの中に一瞬何かが

浮かび上がったように見えたからだ。

見えないはずの何か。

決して見えてはならない何かが。

ひょっとしたらそれは車のライトが照らし出した何らかの影かもしけなかつた。

恐怖心が生み出した勘違いかもしれない。

そう思いたかつた。

ガラス越しに合致したその視線の主がにやりと笑つたように見えたのもきっと……

了

(後書き)

脳内イメージではすこじこになっていたのですが、できあがつてみたらこじんなもんですね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3903u/>

見ている.....

2011年7月4日03時43分発行